



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

唇

5月の末に「ピンクピクブルース」という芝居をやる。久しぶりにちよつとダサ格好いい芝居をやりたかったので、男の子達に持ちかけた企画だった。

実は10年前にやった芝居のリメイクなのだが、その時「男だけの芝居をしよう」と立ち上げた芝居だった。タランティーノの「レザボアドツグス」に影響されまくっていた時期だったからかもしれない。あの映画のB級な味、男優達のダサくてキュートな魅力、なによりあんなありそうもない設定を、さっさと映画にしてしまうタランティーノという監督

の遊び、心に一発食らった後だった。

芝居や映画というものは、名作だけあったらいいというものではない。名作の間にチラチラとB級の作品があるからこそ、双方の良さが分かるのだ。A級の作品ばかり観ても感動しつづけられないもので、B級作品の軽妙さや、気軽さも必要なわけである。

B級なこと…他にもある。食事の趣向、ペットの可愛さ、酒の趣味、洋服の選び方、好きな季節…歴史に関係のない個人的な趣向、それらはB級なのだ。そう、人間の生きる楽しみはすべてB級ともいえるだろう。だから人は時々B級を欲する。

去年一年、ずっと大阪弁の「ええ話」を上演してたので、私たちも少々小劇場の匂いを取り戻したかったというのだろうか、

「すんません、ほんまは大阪弁の芝居ばかりと違うんです。格好つけた芝居もしますねん。踊ったりもするし、それも劇団の顔のひとつです

ねん」

とベタベタな関西弁で言い訳したくなつたという所である。

さて、芝居の内容はそんなわけで小劇場空間らしい「ありえない」設定。ある日、ラジオから「人を殺して欲しいやつは電話してくれ」なんてメッセージが流れてくる。それを鵜呑みにした7人の男たちが集まつてくるといふ出だしである。どうです？ このありえない、格好悪さ。B級の匂いプンプンでしょ？ こんなダサイ芝居を一生懸命やるのが役者の本領発揮だつたりするわけなのだ。殺人依頼する台詞を、役者がどこまで説得力持たせて吐く事が出来るか？ そんな楽しさを味わえるのがB級作品の楽しみなのである。

ところで、劇中に女を果物にたとえらると？ というお遊びっぽい会話が出てくる。「俺は桃だな」と言う人もいれば「アッサリしたリンゴのような女を一切れサクツと食べたい」と格好つける男もいる。「いや、みかんがいいな」と庶民的なことをいう奴も…さてさて、あなたは異性

を果物にたとえると？なんて考えた事があるだろうか？ 私は時々そんなことを思う。

見ていただいている写真は今回の芝居のチラシの一部なのだが、女はやっぱり唇だなとアップにしてみた。胸でもケツでもない。もちろん顔でも：女って生き物は唇なんじゃないか？ それが食欲をそそる果物を連想させるような形だったら、さぞいいだろうなと、私の中の「おっさん心」はくすぐられているのだ。唇からさくらんぼを想像させる女がいたら？ 私だったら食べてみたいと思うだろう。少なくとも一口は…。

今はこんなB級の発想を楽しんでる毎日だ。役にもたたないが、考えると楽しい事。それも人間には必要なことではないだろうか？

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーII」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
